

# 素朴実在論、幻覚、選言説

横山幹子 (Mikiko Yokoyama)

筑波大学図書館情報メディア研究科

我々は普段、世界には我々の知覚や思考から独立した対象があり、我々の感覚的経験はその対象についてのものであると考えている。たとえば、今私が窓の外の木を見ているとしたら、私の経験は私の心から独立した現実に存在する外的な対象である木についてのものであり、私はその木に直接気づいていると考えている。ここでは、このように、我々の経験は心から独立した対象についてのものであり、我々はそれに直接気づくことができると考える立場を素朴実在論と呼ぶ。

そのような意味で考えられた素朴実在論は日常では当たり前のことのように思える。しかし、哲学においては、素朴実在論は幻覚や錯覚が存在することと矛盾し、それゆえそれは間違いであると論じられることが多い。ここでは、幻覚や錯覚の存在にもかかわらず、素朴実在論を守ることができるのかについて論じたい。ただし、ここでは幻覚の場合に限定する。なぜなら、確かに、幻覚も錯覚も真正な知覚が失敗している場合であるが、それらは外的対象がある場合とない場合に分けられ、それぞれ別に考えたほうがよいと思われるからである。

その際、まず、素朴実在論に反対する幻覚からの議論がどのようなものか確認する必要がある。P. Snowdon の見解を受けた W. Fish の定式化によれば、その議論は、幻覚の場合に素朴実在論が偽であることを主張する「土台 (base case)」とその偽を真正な知覚を含むすべてに広げる「拡張段階 (spreading step)」の二つの部分からなる。たとえば、視覚的な幻覚の場合、見られるべき適切な外的対象がないのに主体はそれがあるかのような視覚的経験を持っているのだから、素朴実在論は偽である。そして、一人称による知覚的経験と幻覚的経験の区別不可能性のために、その偽は真正な知覚を含むすべてのものに拡張される。A. D. Smith による定式化によれば、幻覚からの議論の第一ステージは、幻覚は可能だということであり、第二ステージは、幻覚している主体は何か気づいていて、それは普通ではない対象だということであり、第三ステージは、幻覚について真であることをすべての知覚的経験に一般化することである。前者は選言説によって、後者は志向説によって、素朴実在論を幻覚からの議論から守ろうとしているので、二つの定式化には違いがある。しかし、後者の定式化の第一ステージと第二ステージを前者の定式化の土台の一種と考えるならば、幻覚からの議論は、幻覚の場合素朴実在論は偽であるとする土台と、それを一般化する拡張段階に分かれると考えることができる。

幻覚からの議論から素朴実在論を守ろうとする近年の代表的な立場は、M. G. Martin らによる現象的選言説である。彼は、知覚の議論を、センスデータ説、志向説、選言説に分けた上で、選言説を採ることにより、素朴実在論を守ろうとしている。同様に、W. Fish も、素朴実在論を知覚的経験は物的世界の要素によって構成されたものである (先ほどの

規定より厳しい規定である) と捉えた上で、選言説を採ることにより、素朴实在論を守ろうとしている。彼は、土台を認めた上で、一人称による区別不可能性によっては拡張段階に進むことはできないとする。選言説を採ることによって、一人称によって区別不可能であるとしても、真正な知覚の場合の心的状態と、区別不可能な幻覚に含まれる心的状態は異なる種類のものだと主張し、拡張段階を防ごうとするのである。しかし、その議論がうまく行くためには、幻覚的経験がどのようなものを示さなければならない。そして、それに関しては、彼は、幻覚は、真正な知覚ではない一方で、真正な知覚なら持っただろう影響と十分に類似した影響を持つ心的状態だと考えている。

しかし、小草氏が指摘しているように、ここで言っている素朴实在論を幻覚からの議論から守るためには、必ずしも選言説を採る必要はない。実際、A. D. Smith は、志向説を採ることにより拡張段階を防ぎ、幻覚からの議論から素朴实在論を守ろうとする。彼によれば、確かに、幻覚している人は、何らかのものに気づいていなければならないが、だからといって、現実の普通ではない実体が幻覚の対象であるとする必要はない。真正な知覚と幻覚は、現象的に同一である気づきの対象、志向的对象を持っている。真正に知覚された対象と幻覚された対象の違いは、幻覚された対象が存在しないということだけである。幻覚において存在しない対象に気づいているという事実から、真正な知覚の場合も、そのような存在しないものに気づいていると推論する理由はない。

上記の二つの考えは、どちらも拡張段階を防ごうとするものである。選言説は、区別不可能な感覚的経験を認めるとしても、幻覚と真正な知覚は異なる種類のものであるとして拡張段階を防ごうとする。志向説は、幻覚も真正な知覚も現象的に同一である気づきの対象を持っているということをも認めた上で、その気づきの対象は現実の普通ではない実体である必要はないとして拡張段階を防ごうとする。本発表では、それぞれについて W. Fish と A. D. Smith の考えを例にとりながら、幻覚からの議論から素朴实在論を守るためには、選言説と志向説のどちらが説得力を持つかについて考察する。

#### 参考文献

- Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009.
- Fish, W. “Disjunctivism, Indistinguishability, and the Nature of Hallucination”. *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Haddock, A.; Macpherson, F. ed. Oxford, Oxford University Press, 2008, p. 144-167.
- Martin, M. G. F. The Transparency of Experience. *Mind & Language*, Vol. 17, No. 4, September, 2002, p.276-425.
- Martin, M. G. F. “On Being Alienated”. *Perceptual Experience*. Gendler, T. S.; Hawthorne, J. ed. Oxford, Oxford University Press, 2006, p. 354-410.
- 小草泰. 知覚の志向説と選言説. 科学哲学. vol. 42, no. 1, 2009, p29-49.
- Smith, A. D. *The Problem of Perception*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 2002.
- Snowdon, P. “How to interpret ‘direct perception’ “. Crane, T. ed. *The Contents of Experience*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992, p. 48-78.